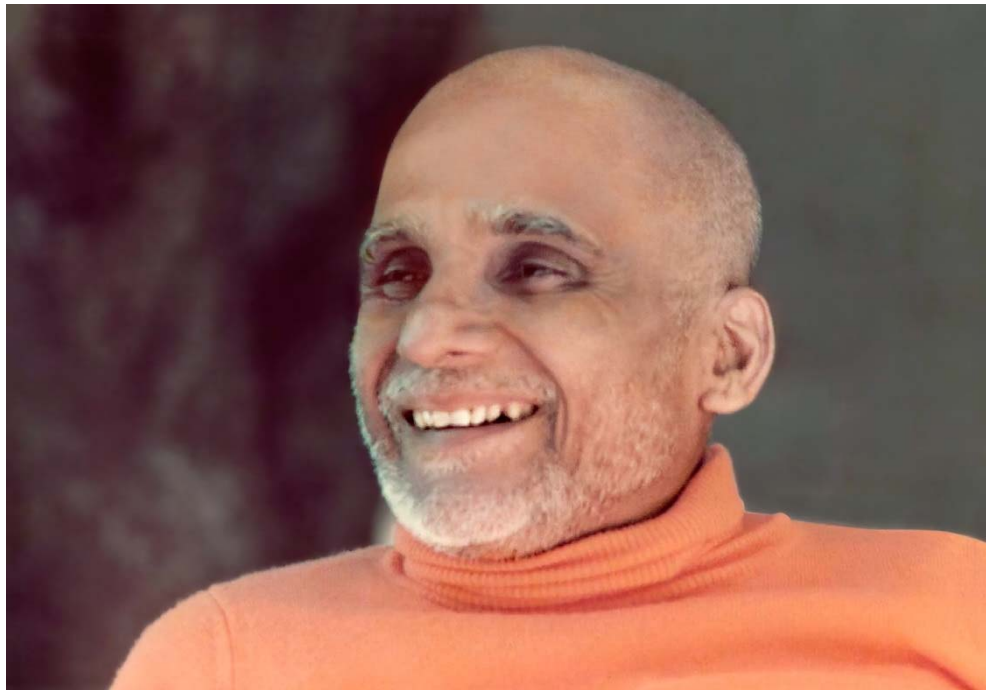


知性の限界

The Limitations of Intellect

2021/11/23 版



スワミ・クリシュナンダ 著

The Divine Life Society

Sivananda Ashram, Rishikesh, India

ウェブサイト： <http://www.swami-krishnananda.org>

他の和訳： <https://yogajbooks.wordpress.com/>

(サットサンガでされた講話)

私たちにとって知性が最も影響力を持つ能力であるため、宗教的活動は総合的ではなく知的な性質を強く帯びる傾向にあります。私たちには知性を誇りに思う傾向があり、そのような自負心を戒めることわざもあります。

多くの人にとって、自分が知性的な人間だと思われることは嬉しいことであり、知性が人間のすべてではないということが忘れられがちです。理性的、知性的、そして現代社会の思考に則した人間でありたいという欲求から生じる自己満足は、最終的には人間の霊的探求のためになりません。

感情的に動揺したり、社会との対立や反対に遭遇して腹を立てたり、苦悩したり、苛立ったりするとき、私たちが完全に知的な人間ではないことが分かります。絶対に腹を立てることがない人はいません。これは知性的な人間の根底にも理性的ではない側面があることを示しています。しかし知性を重要視するあまりに、そのような側面は宗教や霊的修行において重要ではないと無視されるのです。宗教においても自負の念があり、霊的修行の道を歩んでいることを誇りに思うのです。

自負心は必ずしもこの世の目に見える悪ではありません。神聖なもの、また、私たちが頭で神を考えるとときにも自負心があります。宗教あるいはヨーガの技法として、呼吸に意識を向けたり、チャクラに意識を集中させたりするテクニックが一般的に教えられています。眉間に意識を集中させている人も多く、そのような凝念を実践していることに誇りを感じているものです。私たちには、他人から認められることに最高の価値があるこの世界で、信仰心が篤い人間だと思われたい隠れた承認欲求があります。私たちは非常に薄弱な根拠に基づきたいへん危険な道を歩んでいるのです。

人は基本的に知性的であるというのは事実ではありません。近年アンリ・ベルクソンは、名著『創造的進化』で、人間は基本的に非理性的であり、人間の合理性は、この世界を、現実には存在しない主体と客体に分けて考える非合理的な思考の結果であると主張しています。ベルクソンは知性が、真理、実在探究のための人間が持つ最高の能力であるという誤った考えを知性によって植え付けられたために、どれほど悪影響がもたらされたかという点について何百ページも費やしました。人間は内的器官の働き方の一つである分析的理解といった心理機能ではありません。たとえそれが内的なものであっても、

人間は単なる器官ではありません。心、知性、感情、意志、記憶などはもちろん人間の一部ですが、それぞれが単独で人間の本質だとは言えません。

霊的探究は心理的な探究ではありません。そのため単なる心理的活動とは区別されます。宗教の本質は霊的探究と同じだと言えますが、それは人間の心的器官の働きではありません。それは人間全体の働きなのです。ヨーガ、霊的探究、真の宗教的探究では人間全体が宇宙全体に反応するのだと幾度となく聞いたことがあると思います。

私たちの全体というのは非常に興味深いものであり、私たちが日々暮らしていく中で行う思考が私たちのすべて、全体であると誤解されやすいものです。今このホールでサットサング中の私たちは特定の思考をしています。今の考え方が、私たちができるすべての考え方ではありません。このホールとは異なる状況下で、今と異なる思考をすることも可能です。

ですから、私たちの人格のすべてが行動として表現されているわけではないのです。私たちの感情は潜在意識に追いやられています。私たちは自分が感情的あるいは感傷的な人間だと思われたくありません。知性的であり、理性的な人間だと思われたいのです。感情は有害なもの、ある種の欠点であり、理性的あるいは科学的な視点での理解に恵まれずに、過剰に感情的であることは、人間社会では品格を欠くものだとされるのです。

冷静さを持って機能しているようには思えない知性が、理性的な道具として、これほど崇められているのは理解しがたいことです。知性が本能の影響を受けていることを精神分析の研究は明確に示しています。私たちは感情や信仰、伝統、さらに言えば、気まぐれや隠された欲望を正当化するために知性を用いています。

理性は私たちの欲望を正当化するための便利な道具であり、定義することも難しい知性と呼ばれる型にはめるとき、科学的言語で理性的な論証が可能なものとなるのです。私たちは知性が何であるかをよく知っているつもりですが、実はその意味を理解していません。知性は定義することが難しい微妙な働きであるとともに、人生における完全なガイドだという誤った考えに私たちを導く危険性を持っています。しかし、認めたくないかもしれませんが、正直に自分を見つめたならば、私たちが理性や哲学よりも感情や気持ちによってより強く導かれていることに気づくはず。私たちは、このようなことを指摘されるのも不快に思います。哲学者は感情的あるいは本能的な人間ではありませんが、すべての哲学者が本来あるべき哲学者の姿をしているわけではありません。

進化の過程でこれまでに通過してきた段階の名残というものがあります。個体は 840 万種の生き物としてこの世界に生まれてくると経典は言いますが、それはつまり、この創造過程において人間がすべてではないということです。経典はまた、私たちは、人間以外の何百万種もの生き物を経て人間のレベルにまで進化したのだと言いますから、私たちの人格深くにそれらの名残があるのは当然のことです。

ベルクソンは、理性や知性よりも本能のほうが実在に近いとさえ言います。努力を伴う人間の理性と違い、動物は意識的に努力をしなくとも自然に働く本能によって多くのことを理解できるようですから、ある意味ベルクソンの考えは正しいと言えるかもしれません。知性は必ずしも無意識には働かず、大きな努力と意識的な思考を要します。本能はそのような努力を必要とせず、無意識に働きます。コンピューターのように自動に働き、環境の本質を理解するのです。

私たちが他の生物として生まれてきたことがあるのであれば、このような本能が私たちの中に存続し、私たちが完全に知性的になることを阻むのです。私たちは知性的であっても、泣いたり悲しんだりします。人生の中で涙を流すことがあります。涙を流すことは知的な活動ではありません。そこには知性以外の、より深く、隠れた力があります。愛情や憎しみの本能は様々なかたちで表れますし、ときには感情が理性的な説明で片付けられてしまうこともあります。

社会的な規則や慣習は、ときに人生において正直であることの障害となります。私たちは、理性や科学が尊重され、感情的なことが好ましくないとされるこの世界に従うしかないからです。そのため私たちは社会的伝統と見せ掛けから成る世界に巻き込まれ、無知および事実との関連性に関係なく続けられる習慣の牢獄に閉じ込められているかのようです。

ですから、クンダリーニ・ヨーガやハタ・ヨーガ、あるいは先ほど触れた呼吸に意識を向けるテクニックなど、求道者が重要視し、熱心に実践する宗教的活動の単なる知性に基づく修練は、それはそれで良いのですが、最終的には不十分です。天使にさえ容易に知り得ない神秘が人間にはあるのです。

私たちの本質は神のみぞ知るところです。私たちの中に何が秘められているかは、私たちにも完全には分かりません。ですから私たちの本質、私たちの人格を構成する要素について考えるときには、少し慎重にあらねばなりません。私たちは生活に忙しく、時間

をかけて物事を考える余裕がありません。どうしても仕事などの活動に流されてしまいがちです。会社勤めや商売、家事などに忙しく、私たちの本質について深く考える余裕がないのです。そのため私たちは、自分が置かれている生活環境という意味での社会関係が私たちの本質であるように思えるのです。

私たちは、アメリカにいればアメリカ人のように考え、イギリスにいればイギリス人のように考え、宗教的正統主義者の中にいれば正統派のような考えをしますから、私たちの真の本質が何かは分かりません。しかし、社会の風による多大な影響のために、稀にしか遭遇することのできない私たちの本質というものがあります。たとえ四人家族といった極めて小さな社会的集団であっても、その中で完全に自分に正直であることができませぬ。父や母、兄弟等の影響があるからです。小さな家庭であっても家族の目が気になるために自分自身が抑制されます。より多くの目が気になる大きな社会では尚更です。

時には、人知れず、誰とも交わらない隠遁生活によって長期間一人になり内省することが勧められるのはこのためです。私たちの中に秘められた感情は、意識的なレベルで活動できる機会を断たれると激しさを増すことがあります。私たちは人間関係の中で不自由なく暮らしているために、私たちを悩ませるような感情が表面化するはけ口がないのです。友好的な人間関係の環境に身を置いている限り安心していられます。

私たちは人間関係に守られていると同時に、時機が来れば私たちの本質を発露できる可能性があると感じています。この感覚が感情に安心感を与えるのです。断食をしている人は、いずれ食べ物をお口にできることを知っていますから、飢えに苦しんでいる人のような心配をしません。貧困のためにその日の食事のままならない人は、意図的に一か月の断食をしている人よりも不安を感じています。断食をしている人は、一か月後には食事をとれることを知っていますが、貧困で飢えている人は次いつ食事にあつつけるのか分かりません。

ですから安心して暮らせる社会、環境においては、潜在的な感情が表面化することがありません。表面化することが許されない、あるいは今は表面化する必要がなくとも、外に出せる機会、可能性が約束されているからです。二か月後にお金を返済すると約束すれば、債権者はその言葉に満足して帰ります。しかし借金をしている人に返済するつもりがないと分かれば状況は異なります。債権者は反発し、怒りで声を上げ、玄関に居座るでしょう。

自身が置かれている環境から全面的な反対を受けたり、いかなる満足も得られないような場所で長期間にわたり一人でいたりした場合に、感情のこのような反抗的な態度を経験することになります。その時私たちは世俗的な喜びを夢見るようになるのです。人里を遠く離れると私たちの欲望はより痛切なものになり、落ち着かなくなります。求めているものが得られないことが分かっているからです。しかし町に住んでいれば、たとえそのような感情がなくとも、感情を満たすことができるという希望があります。安心感が大事であり、安心できない状態が問題なのです。

このような私たちの特質を知り、政治家が目的達成のために野党と対話をするように、私たちの内に秘められた性向を表面化させるための意識的な対話をするのが賢明です。対抗勢力であっても、その存在を完全に無視し続けるわけにはいきません。社会の中だけでなく、私たちの中にも対抗勢力はあります。できれば考えたくない考えというものがあります。非難されるものであるため認めたくない、内に秘められた衝動というものもあります。

なぜ非難されるのでしょうか。これもまた私たちが育った環境の結果であるため、明確に説明することはできません。私たちがアフリカのブッシュマン、あるいは中央インドの未開民族等の中で育ったなら、私たちの行動や感じ方は大きく違っていただでしょう。人は社会の産物だとする社会学の見解には一理あります。それが全てだとは言えませんが、かなりの真実がそこにはあります。社会的伝統や家庭のしつけが私たちの思考に与える影響を私たちはよく知っています。

これらの制約がヨーガ実践の障害となります。とても重要な意味で、私たちを取り巻く人間関係は、必ずしも真のヨーガにおける成功に貢献していません。しかし、与えられた環境で最善を尽くすしかありません。ヨーガを学ぶ者はみな、知性や意志ではなく主に感情的である、自身のより深いルーツを意識化させるために、巧みな内省という冒険に取り組む必要があります。

ヨーガのなかでもバクティ・ヨーガ（信愛の道）は、この困難をよく理解し、人間の感情を神への愛と呼ばれるものに昇華するいくつかの方法を示しています。神を愛するのは容易ではありません。私たちは神を愛するよりも、どちらかといえば神を恐れます。愛の対象は美しいもの、喜びをもたらすものであり、裁判所のように恐怖、権力、正義があるところに対して愛があらわれることはありません。最高裁判所の裁判長を愛する

のは容易ではありません。信愛、献身的愛と呼ばれる内なる働きは、恐れを抱かせるだけの対象ではなく、対象に美しさを認めるために生じるものだからです。

対象物にある種の喜びが認められるとき、その対象物を美しいと感じます。美とは、外面化あるいは客観化された喜びのことです。私たちが内に求めている喜びが外の対象物に注がれるとき、その対象物が美しく見えるのです。ですから対象物自体が美しいのではなく、対象物の中に私たちが求める喜びを見るから美しいと感じるのです。どのような物をいつ美しいと感じるかは分かりません。美を正確に定義するのは非常に困難です。私たちはさまざまな願望を内に秘めているため、その時々において異なる物が美しく見えるのです。

私たちの願望は人生を通して一様ではありません。願望の激しさ、そしてその内容さえも変化します。このため、生まれてから死ぬまで一つのものだけを愛した人はいません。高速で走る電車の乗客のごとく、刻々と変化する進化という乗り物に乗っている私たちは、常に異なるものに接しています。ですから、私たちの中で感情的に駆り立てるものが変化すると、私たちの関心対象も変化します。

私たちはみなこの世界に美しさ、壮大さ、喜びを見ますが、神にそれらを見出すことができません。神のことを考えるとき、そこには恐れがあります。実際のところ、私たちは神に魅了されていないのです。心の底では神を恐れています。神の法が非常に厳格なシステムに見えるため、父や母、妻、夫などを愛するように神を愛せません。しかし、これは人間の間違った感じ方です。正義と権威、科学、物理的法則、法や数学などが神ではありません。神は警察署長や将軍のような存在ではなく、美の源泉、壮麗の極み、この上ない喜び、言い表せない至福、計り知れない歓喜なのです。

私たちは、神の力を想像することはできても、神の美しさを感じることはできません。神が全知全能であり、遍在することは、ある程度想像できても、私たちは神の美しさを知りません。神の美しさを理解することができないのです。私たちにとって神は偉大なる父、創造主であり、審判を下して罰したり報いたりする裁判長のような存在です。しかし美は人知れず静かに浸透する霊妙な神秘であり、エンジニアが行う計算のように公然としたものではありません。

神への信愛の道を教えるバクティ・ヨーガは、多くの点で論理的思考よりも人間の本質をより深く理解していると言えます。バガヴァッド・ギーターの第十一章の終わりの方

に書かれている穏やかではないメッセージには重要な意味があります。(アルジュナに) 普遍相を見せたクリシュナは、経典の学習、供犠、慈善、苦行を行ったとしても、普遍的存在である神の姿を見ることはできないと言います。

ちっぽけな一個人が何を行っても不十分なのであれば、神の壮麗なる^{すがた}完全性を知るにはどうすればよいのでしょうか。バガヴァッド・ギーターの言葉はシンプルですが、そこには深遠な意味があります。「経典を学んだり、苦行や布施、祭祀をしたりすることで私を見ることはできない」(ギーター 11.53)。では、どうすれば見ることができのでしょうか。「ひたむきな信愛によってのみ私を見得るのだ」(ギーター 11.54)。この信愛とはどのようなものなのでしょうか。この世のはかない対象物に注ぐ表面的な愛情ではありません。この信愛とは人の魂より生じる愛のエッセンスです。知性の特性でも表面的な心理機能でもありません。人格の根底が揺るがされるとき、私たちは真に愛している状態だと言えます。この愛に相対する憎しみというものもありますが、憎しみは私たちの本質ではありません。憎しみは私たちの心が装う表面的な状態であり、私たちの根本は至福、光輝、愛である魂です。

よって^{バクテ}献身的愛情によってのみ神の普遍相を見ることができると言うとき、バガヴァッド・ギーターは感情的になることを教えているのではなく、それは魂に触れることができるのは魂だけであるという偉大な教えなのです。この世界の一時的な愛を含むすべての愛は、真我愛が心的な働きを介して現れているだけです。私たちが自分自身に持つ自己愛、ときに抑えがたいほど私たちを魅了する対象との出会いによって経験する激しい愛は、美そのものである神がどれほど私たちを魅了することができるかを示唆しています。この世の物の中に、私たちを完全に引きつけ、身を焦がし、その愛情ためなら自己犠牲もいとわない状態にさせてしまうのがるのであれば、神の美しさ、栄光、神の至福がどのようなものであるか、普段の私たちができる以上の深い熟考と瞑想を必要とするとと言えます。

ですから、瞑想、霊的修行では、私たちのすべて、心の隅々まで白日の下にさらす必要があります。意識的な精査、理解、適切な対応ができるように、目を背けたいもの、忌まわしいものも全てさらけ出すのです。何かを見逃したり、無視したり、否定したりしてはいけません。

人生における使命として宗教を実践するとき、つまり正しい意味での霊性とは、私たちの全体が、宇宙全体の实在へと突き進んでいくことです。ここに最も重要なポイントがあり、時間をかけて考える必要があります。

— OM —